



TITLE:

形式社會學概念の批判 - 一般社會學の概念(四) -

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

CITATION:

米田, 庄太郎. 形式社會學概念の批判 - 一般社會學の概念(四) -. 經濟論叢
1928, 27(4): 478-504

ISSUE DATE:

1928-10-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129682>

RIGHT:

京都帝國大學經濟學會

經濟叢論

第四號

第十二卷

昭和三年十月一日發行

論叢

財産より生ずる無形所得の課税 法學博士 神戸 正雄

形式社會學概念 文學博士 米田 庄太郎

租税負擔及び經費の國際比較 經濟學博士 汐見 三郎

時論

老齡船の運用とその處分 經濟學博士 小島 昌太郎

說苑

明治初年に於ける大阪通商會社 經濟學士 菅野 和太郎

學と實踐 經濟學士 福井 孝治

雜錄

大阪の文化と造幣局 經濟學博士 本庄 榮治郎

私營質屋業の概況 經濟學士 楠見 一正

大阪市の人口増加に就て 經濟學士 武田 長太郎

法令

鐵道勞務扶助規則中改正

形式社會學概念の批判

——一般社會學の概念(四)——

米田庄太郎

(四) 特殊社會學概念——ジムメルの

形式社會學概念の批判

- (7)「社會學」第一章に於ける形式社會學概念の發達并に其の批判
(c) 社會學と心理學

心理學を一切の精神科學の基礎科學と認め、一切の精神現象は本來心理學的に説明さる可きものと見る所謂心理學主義は、獨逸に於ても第十九世紀の後半紀間に一時大に勢力を振ふて居たのであるが、現世紀に入りてより其の反動が起り、心理學主義を排斥する傾向が一般に勃興して來た。そうして其の影響によりて社會學に於ても、一時大に勢力を振へる心理學の方針を排斥する傾向が起つて來たのであるが、今右の形勢に照らして、社會學と心理學との關係に關するジムメ

ルの見解の變遷を考究することは、現今の社會學の發達の研究上、甚だ興味ある又重要な一問題である。併し此處で詳しく論述する餘白はないから、只簡單に其の要點を批判的に考察するだけに止める。

千八百九十四年の論文「社會學の問題」に於ては、ジムメルはさきに述べし如く、先づ心理學を例として社會學の可能性を考察し、心理學が特に心理的なもの即ちあるがまゝの心理的諸機能或は諸力の科學、換言すれば意識の諸内容から之を產出する心的諸力を抽象して對象とする科學として成立して居るのと同様に、社會學は特に社會的なもの即ちあるがまゝの社會化の諸形式或は心的相互作用の諸形式の科學、換言すれば社會の諸内容から抽象されたる社會的諸力を對象とする科學として成立し得るものなることを論述して居る。要するにジムメルは心理學は心的作用の科學として、又社會學は心的相互作用の科學として、共に内容から抽象されたる作用の科學として成立するものと考へたのである。併し彼は心的作用と心的相互作用或は社會化との關係、隨ふて心理學と社會學との關係に就ては明白に論述して居ない。かくて此の論文に於ては社會學は心的相互作用或は社會化の形式の科學として、社會の諸内容の科學としての他の社會科學から區別される、一の獨立なる科學として如何に成立し得るかは示されて居るが、併し心理學から區別される一の獨立なる科學として如何に成立し得るかは示されて居ない。否な當時の彼の思想の

一般的傾向から推察すれば、彼は大體上社會學を一の心理學的科學と見做して居たと思はれる。

(此の點に關する詳しく論述は、餘白がない爲め省略して置く) 然るに千九百年頃から彼の思想上に起れる變動は、社會學と心理學と

の關係に關する彼の見解に於ても亦、本質的に重要な一變動を惹起して居るので、そうして其

の變動は「社會學」第一章及び第八章の一餘論「社會心理學の本質に就て」(同年に「社會科學及び社會政策

に公にされ
た一論文)に依て、最とも簡明に表示されて居ると思はれる。

要するに本書に於ては、ジムメルは社會學が一見すれば心理學の一章或は少なくとも社會心理學の一章に外ならぬものの如く思はれるに拘らず、本來心理學から、更に社會心理學からも區別される一の獨立なる科學であることを論證せんとして居るのである。先づ本書第一章に於て、彼は社會學を心理學から獨立する科學として、如何に論證せんとして居るかを吟味して見よう。

今ジムメルの論ずる處によれば、方法論上から見て精神科學一般の原理に對して決定的に重要なものは、心理的事實の科學的研究は必ずしも心理學であらねばならないのでないと思ふこと、詳言すれば吾人が絶えず心理學的規則及び知識を運用する場合、個々の各事實の説明が只心理學的途に於ての可能である場合、社會學内に於て見られる如く、其の科學的研究の意味及び主旨は、必ずしも心理學即ち一定の内容を只夫れ自身のみが擔ひ得る心理的過程の法則を究明することであらねばならないのである、全く其の内容及びその形成其物を究明することであり得ると云ふことである。そうして右の區別をよく辨別することによりて、此處に心理學から獨立する精神科學の存立が理解されるのである。かくて社會化の事實は云ふまでもなく一の心理的現象にして、個々の場合の歴史的生起は只心理學的にのみ理解し得られ、社會狀態の歴史及び記述は總て心理學的知識の實行であると云ひ得られる。併し吾人は又一の特殊な科學的主旨に従ふて、此の心理的事實を具體的にあるがままでは全く吾人の注意外に置き、そうして社會化の概念の下で整理される處のその諸内容を、夫れ自身に於て追究し、分析し、結び合はせることが出来る。此の如くにして心理學から獨立する社會化の科學として社會學が成立し得るのである。要するに社會學の所與或は史料は心理的事象にして、其の直接的現實性は先づ心理學的範疇に従ふ。併し心理學的範疇は事實の記述の爲めには必要缺く可からざるものであるが、社會學的考察の目的外に在るものにして、社會學的考察の目的につまり心理的事象によりて擔はれ、又屢々只

それによりてのみ記述する可き社會化の實質性或は當體性を究明することにあるのである。是れ戯曲は始めから終りまで只心理的事象のみを保有し、只心理學的にのみ理解され得るものであるが、しかも其の主旨は心理學的知識を獲得することに存するのではなく、心理的事象の内容を悲劇、藝術形式、生命象徴等の見地の下で形成する總合を究明することに存するのと同じである。

右に述べし處によりて、ジムメルは從來大體上一の心理學的科學と見て居た社會學を、「社會學」に於ては心理學から區別される一の獨立なる科學として如何に建設せんとしたか理解される。そうして又其の見解はつまり千九百年頃から彼の思想上に起れる變動の結果として、產出されたるものであることが推察される。要するに千八百九十四年の論文に於ては、ジムメルはさきに述べし如く、心理學は意識の内容から抽象されたる心理的機能或は作用或は力の學として存立して居ると同様に、社會學は社會の内容から抽象されたる社會化の力或は作用即ち心的相互作用の學として成立し得るものと論じ、心理學と同じく作用の學として社會學の可能性を論證せんとしたのであるが、「社會學」に於て心理學から判然區別される一の獨立なる科學として確立せんとするに當つては、社會學は「一定の内容を只夫れ自身のみが擔ひ得る心理的過程の法則を究明せんとするもの」でなく、「其の内容及びその諸形成其物を究明せんとするもの」、或は「社會化の概念の下で整理される處の、社會化と云ふ心理的事象の諸内容を夫れ自身に於て追究し、分析し、結び合はせんとするもの」と論じ、心理學が作用の學であるに對して、社會學は内容の學であるとして、兩者を區別せんとして居る。かくてジムメルの社會學概念は作用の一科學としての

社會學の概念から、内容の一科學としての社會學の概念に轉化して居ると思はれる。

然るに今社會學は内容の一科學であると見るに於ては、社會學は社會の内容から抽象されたる社會の形式を研究する科學であると云ふ彼の社會學概念の根本思想、隨ふて彼が根本的に重要視する社會の形式と内容との區制は甚だ曖昧なものとなつて来る。是れ社會學は内容の一科學であると見る彼の右の見解と、社會學は社會の内容から抽象されたる社會の形式を研究する科學であると云ふ彼の根本思想とを結合すると、社會學はつまり社會化の内容から抽象されたる社會化の形式の内容を研究する科學であると云ふ事になるからである。但し此の際内容 (Inhalt) と内實 (Gehalt) との差別に注目し、社會學は社會の内容から區別されたる社會化の形式の内實を研究するものであると見るに於ては、論理上何等の曖昧又は混雜を生じない。是れ形式は内容から區別されるが、併し常に夫れ自身の一定の内實を有するものにして、内實を有しない形式は空虚なもので科學の對象となることが出來ず、そうして形式の科學的研究とはつまり其の内實の研究を意味するものであるからである。實際に於てジムメルも彼の社會學に於て、社會化の形式の内實を研究して居るのである。しかも彼は千九百年頃から彼の思想上に起れる變動の結果として立てた新しき見地から見て、作用の一科學としての心理學から、社會學を根本的に區別する爲めには、之を内容の一科學と認めねばならぬと考へたと思はれる。かくて彼の社會學概念の根本思想たる

社會化の形式と内容との區別は、上に述べしが如くに曖昧なるものとなつて來たのである。されば彼の社會化の形式と内容との區別を明瞭に固持して、そうして社會學と心理學とを夫れ夫れ獨立なる科學として確立せんとするに於ては、一を作用の科學、他を内容の科學として兩者を區別せんとす可きでなく、一が對象とする心的作用と、他が對象とする心的相互作用との差別に基いて、均しく作用の科學としての兩者を區別す可きであると思はれる。私は右の見地からして社會學と心理學とを、夫れ夫れ獨立の科學として確立することが出來ると信じて居るのであるが、此處には自説を組織的に論述する餘白はないから、別に論述することとする。

とにかくジムメルは右に述べし如くに、社會學を心理學から獨立する一の科學として確立せんとするのであるが、更に彼は社會學を社會心理學からも區別せんとして居る。そうして兩者を區別することは今日汎く行はれて居る見解であるから、又此の區別に關する論究は純正社會學の概念を精確に規定する爲めには、甚だ肝要なものであるから、此處に「社會學」第八章の一餘論「社會心理學の本質に就て」に依つて、ジムメルの見解を簡單に批判的に考察することとする。今ジムメルは先づ社會心理學を「社會」の心理學即ち廣義の群集、團體、國民、時代等の心理學と解し、超個人的心意或は精神を心理學的に研究する處の、個人心理學から獨立する一の特殊な心理學と見る見解を、個人心意或は個人精神或は個人意識以外又は以上に存立する心意或は精神或は

意識なるものの存在しないことを論證することによりて排斥して居る。そうして社會心理學なるものが存立するとすれば、それはつまり一の個人の心理的過程が、他の個人の心理的過程或は社會的圈境から一定の影響を受けて進行する場合には、如何なる變動を生ずるやと云ふ問題を研究するものに外ならないので、かくて社會心理學なるものは一般心理學即ち個人心理學の一部門に外ならないと論じて居る。要するにジムメルによれば、社會心理學は個人心理學或は一般心理學の一部門として、その他の部門即ち生理的心理學と相並立するものにして、生理的心理學が物體との結合によりて如何に心理的事象が規定されるかを研究する如く、他の心意との結合によりて如何に心理的事象が規定されるかを研究するものである。さればジムメルは彼に先だちて既にタールドの主張して居た見解、即ち心理學とは根本的には生理的心理學であるか、又は社會心理學であるかであつて、單なる心理學なるものは存在しないと云ふ見解と、大體上同一の見解に達したのである。(但しタールドよりも以前に、心理學を生理的心理學と民族心理學とに根本的に大別せるグントの見解も大體上同じものである。)併し又此の點に於て、タールドとジムメルとの間に重大なる差異も存在する。それは即ちタールドが社會心理學或は彼の云ふ心と心との心理學を以て社會學の骨髓と見んとしたのに反して、ジムメルは社會學を社會心理學から獨立する科學として兩者を根本的に區別せんとしたことである。

ジムメルの見地から見れば、社會學は既に心理學から獨立する一の科學である以上、そうして

社會心理學は心理學から獨立するものでなく、其の一部門をなすものであるとすれば、當然社會學は社會心理學からも獨立する一の科學である可きである。然らば彼は社會學を、心理學の一部門として右の如くに解する社會心理學から、如何に區別せんとしたのであるか。私は此の區別に就て彼の論述して居ることは、あまり明確でないと思へるが、併し大體上同様な思想は今日社會學と社會心理學とを區別せんとする有力なる人々によりても唱へられて居るから、特に注目することが必要であると思ふ。此處に詳しく論述する餘白はないが、要するに彼が社會學と社會心理學とを區別する基礎となさんとするものは、社會學的現象と社會心理學的現象との差別であると思ふ。そうして彼の論ずる處によれば、兩現象共に個人の相互作用から生起するものにして、多數の個人に共通する現象であつても、個人の相互作用から生起せるものに非らずは、社會學的現象でも亦社會心理學的現象でもない。併し個人の相互作用から生起する現象は、二つの相異なる見地から考察され得る。一は其の現象の一の個人心に於ける出現は、他の諸個人心によりて誘致されたるものであるとして、之を考察する見地にして、他は其の現象は主體間に或は個人の間に成立する相關的關係 (ein Gegenseitigkeitsverhältnis der Subjekte) であるとして、之を考察する見地である。そうして前者の見地から考察される場合には、其の現象は社會心理學的現象にして、後者の見地から考察される場合には、其の現象は社會學的現象である。ジムメルの考へによ

れば、心理學的或は心理的なるものと云へば、それは如何なる場合に於ても常に個人心に就て、或は個人心との關係に於て見られたるものであらねばならない。かくて個人の相互作用から生起する現象も、それが心理學的或は心理的なるものと見られる以上は、生理的心理學的なるものと根本的に區別されて社會心理學的なるものと稱せられても、ヤハリ個人心に就て或は個人心との關係に於て見られたるものであらねばならない。そうして個人の相互作用から生起する現象が、個人心との關係から全く切り離されて、當體的に即ち夫れ自身の内容或は内實に於て見られる時に、それが即ち嚴密に云ふ社會學的或は社會的なるものであるのである。かくて社會心理學は個人の相互作用から生起する現象を、一の個人心内に於て他の諸個人心との結合によりて、或は社會的圈境から受ける一定の影響によりて出現するものとして、個人心との關係に於て考察する心理學の一部門にして、社會學は個人の相互作用から生起する現象を、全く個人心との關係を離れて、當體的に即ち夫れ自身の内容或は内實に於て考察する一の科學であるのである。

ジメルが社會學と社會心理學との區別を決定せんとする右の見解は、社會學上大に注目すべきものにして、其の後彼の見解を大體上祖述する社會學者は少なくなく、又彼れと獨立に、更に彼に先だちて大體上同様な見地を發達させた社會學者もある。此處に後者の一例としてヅェルケムを擧げることが出来ると思ふ。ヅェルケムもヤハリ社會現象をあくまで個人心から切り離し

て、否な個人心理現象から獨立して成立し進動する高等なる心理現象として、考察せんとしたのである。そうして夫れが爲めに彼は個人心以外或は以上に存立する現實な、形而上學的でない高等なる心理的實在として、集團心或は集團意識の存在を認め、社會現象を其の產物として考察せんとしたのである。ジムメルはさきに述べし處によりて知られる如く、ゾールケムの云ふが如き集團心或は集團意識の存在を認める見解を極力排斥したので、其の點に於ては兩者の見解はまさしく正反對である。しかも社會現象を個人心との關係から全く切り離して夫れ自身に於て考察せんとし、かくて社會學を個人心理學から獨立する自律的科學と見んとする點に於ては一致して居るのである。

(但しゾールケムは個人心理學と集團心理學或は社會心理學とを全然區別される二つの獨立なる科學と認點に於ても亦ジムメルと見解を異にして居る。されば兩者の社會學概念には根本的に相異なる點は多いのであるが、併し社會現象を個人心との關係から全然切り離して夫れ自身に於て考察せんとし、又かゝる主旨から社會學を心理學から獨立する科學と認めんとする點に於ては、兩者)されば右の點に於けるゾールケム自身の說に對して、彼を祖述して今日佛蘭西の社會學界に於て大勢力を振ひつゝあるゾールケム派社會學者自身が、今や加へんとして居る修正は、ジムメルの見解を批判的に考察せんとするに當つて、大に吾人の參考す可きものであると思ふが、要するにゾールケムが極力心理學的説明を排斥して主張したる所謂彼の社會學主義に對して、ゾールケム派の社會學者中には今や心理學的説明をも取り入れ、かくて新社會學主義(Sociologisme)なるものを唱へ出して居る人々がある。そうして其の傾向を推し進めて行けば、結

局はジュールケムの見地を棄て、大體上タールドの見地をとる方が正當であることが、了解されてくるであらうと思ふが、私はジムメルの同様な見解に對しても、同様な批判を加へたいと思ふ。

私の見る處によれば、タトヒ概念上ジムメルの云ふが如くに社會學的或は社會的現象と社會心理學的或は社會心理的現象とを區別することが出來ても、社會學を社會哲學から區別して純粹なる一科學として見る以上は、研究の實際に於てかゝる繊細な窮屈な區別を固持することは殆んど不可能であるので、隨ふてジムメル自身の社會學的研究中にも社會心理學的考察を混入すること多大にして、彼は社會學者ではなく社會心理學者であると批評した人々すらあるのである。尙ほ「社會學」に於ても、彼は社會化の形式の内實を確定し、組織的に整理するだけで社會學の任務は盡きて居るとは認めず、社會學は更に之を心理學的に基礎付け、又其の歴史的發達を追究す可きものであると述べて居る。(die Feststellung, systematische Ordnung, psychologische Begründung und historische Entwicklung der reinen Formen der Vergesellschaftung) 苟くして彼は其の心理學的基礎附けなるものを甚だ重要視して居るのである。

以上論じ來れる如く、私はジムメルが「社會學」に於て、社會學と心理學とを根本的に相異なれる二つの獨立なる科學として確立せんが爲めに、社會學を心理學と同じく作用の科學と見るものと見解をすて、心理學が作用の科學であるに對して社會學は内容の科學であると見る見解をとら

んとしたのは、千九百年頃から彼の思想上に起れる變動より生まれたる考へ方に基因するものであるが、併しそれは社會學は社會化の形式の科學として、社會の諸内容を夫れ夫れ對象とする他の社會諸科學から區別される一の獨立なる科學であると云ふ彼の社會學概念の根本思想を、甚だ曖昧なるものとならしめるものにして、此の根本思想を固持せんとする以上は、社會學をセハリ作用の一科學として心理學から區別せんと企だてる可きものであると思ふ。そうして私は同じく作用の科學でありながら、心理學は心的作用を對象となし、社會學は心的相互作用を對象となすものであると云ふ其の對象の差異からして、兩者を二つの獨立なる科學として確立することが出来ると思へるのである。又ジムメルが社會學と社會心理學との間に立てんとする巧妙なる區別は、研究上有益なるものにして、先づ社會化の形式の内實を大體上個人心との關係から離して夫れ自身に於て當面に了解せんとすることは、研究上有益なる一方法である。併し此の際に於ても吾人は右の區別を嚴密に固持する必要はないし、又實際上嚴密に固持することも出来ない。此の事はジムメル自身の研究の實際によりても示されて居ると思ふ。尙ほ又社會化の形式の内實を夫れ自身に於て當面に了解するだけで、社會學の任務が盡きたとは云はれない。吾人は更に其の社會心理學的基礎附けを行はねばならない。かくて社會學、嚴密に云へば形式社會學、即ち私の云ふ純正社會學は社會心理學から獨立する科學であるとは云はれない。否な私は社會心理學は社會

化或は心と心との相互作用の根本的一般的原理を究明せんとする方面に於ては、即ち一般的社會心理學としては、形式社會學或は純正社會學と同一物であると見るのである。

純正社會學と社會心理學及び心理學との關係

に關する私自身の説の詳細は、本論文に於て論述する餘白はないから、別に論述することとする。

(d) 社會學と哲學

「社會學」に於けるジムメルの社會學概念を嚴密に了解する爲めには、吾人は更に社會學と哲學との關係に關する彼の見解を究明せねばならない。そうして本書第一章に於ては、彼は既に千九百年の著「貨幣の哲學」に於て、哲學と科學との一般的關係に就て論述して居る思想に基いて、科學としての社會學と哲學との關係を論じて居るのである。

ジムメルの考へによれば、一切の科學は二つの哲學的領域即ち認識論と形而上學との間に挿まれて居る。認識論は科學の根柢に存じ、隨ふて科學其の物によりて究明され得ない處の其の條件、基本概念、前定等を取扱ふものにして、形而上學は科學を完成し、聯結し、科學内に於ては取扱はれ得ない問題及び概念と結び附けるものである。尙ほ嚴密に云へば形而上學は二つの問題を意味する。一は個別認識の斷片的性質に對する不満足の不概念、實質的確定可能及び證明の進行が比較的早く終ることに對する不満足の不概念、思辨の諸手段によりて此等の不完全を補充せんとするに至らしめること、及びまさしく此等の諸手段が個別的斷片知識の無聯結及び相互的無關係を、一の全體形象の統一性に於て完成せんとする平行的欲求に役立つことにして、つまり知識の度合の不完全を完成せんとする形而上學の機能である。二は現實在の内容の意義が存在する方面に關する形而上學の機能にして、吾人は此の方面を意味或は目的として、相對的諸現象の下にある絕對的實體として、價值或は宗教的意義として言ひ表はす。そうして此の形而上學的機能或は精神的態度は、社會に對して左の如き諸問題を起す。社會は人間の存在の目的であるか、又は個人の爲めの一手段であるか。社會は決して個人の爲めの手段でないのみならず、却つて一の障害でないか。社會の價值は其の機能的生活に存するか、又は一の客觀的精神の產出に存するか、又は個人に於て呼び起す倫理的諸形質に存するか。社會の典型的發達階級に於て一の宇宙的類比が示現されて居るか。一般的に社會或は全體の形而上學的宗教的意義は存在し得るか。又はかかる意義は個人精神に保留されて居るか。

今右に述べし如く、總て科學は哲學の二つの領域即ち認識論と形而上學との間に挿まれて居ると見るジムメルの見解は、形而上學の存立を認めず、哲學は只認識論のみから成立すると見る見解が汎く行はれて居た時代にありては、強い反對を惹起したかも知れないが、今日の如く形而上學が大に復活し來り、哲學に於て認識論よりも寧ろ形而上學を重要視する傾向が大に發達せる時代にありては、大體上一般に承認されて居るものと見做し得られる。私自身も哲學と科學との關係に就て、隨ふて社會哲學と社會學との關係に就て、大體上ジムメルと同様な見解を抱いて居る。只私は哲學と云へば嚴密には直ちに形而上學を意味するものと解し、認識論を論理學及び方法論と一緒に包括して學問論 *Wissenschaftslehre* と總稱し、かくて學問全體を學問論と科學と哲學との三部類に大別せんとするだけである。されば私は社會哲學とは即ち社會形而上學を意味するものと解し、そうして社會科學の認識論或は方法論は哲學の一學科ではなく、學問論の一部門と見るのである。要するに哲學と科學隨ふて社會哲學と社會學との關係一般に關するジムメルの見解は、形式的には正當であると思ふ。併しさに述べし如く、彼は本來哲學者であるから、社會學を論理的には科學と認めながら、研究の實際に於ては大に哲學的考察を混入して居ると思はれるので、社會學を純科學として建設せんとするものは、彼の社會學を研究するに當つては、常に其の點に注意して居なければならぬ。

私は「社會學」第一章に於て一先づ完成されたるジムメルの形式社會學概念を、以上述べ來りし如くに批判し評價せんとするのであるが、終りに彼が「社會學」の出版後十ヶ年を経て、彼が死去する前年即ち千九百十七年に公にせる彼の最後の社會學上の著作「社會學の基本問題」に於ては、彼の社會學概念が最後に如何に發展されたかを、ヤハリ批判的に考察することとする。

(8)「社會學の基本問題」に於ける社會學概念の大成并に其の批判

却説千九百八年出版の「社會學」に於て一先づ完成したと思はれるジムメルの社會學論は、前項までに論じ來れる處によりて學ばれる如く、つまり社會學は一切の科學の如く、哲學の二つの領域即ち認識論と形而上學との間に插まれる一の社會科學にして、社會化の形式を其の内容から抽象して對象となすもの、かくて科學としての社會學とは形式社會學を意味するものに外ならず、其の外に科學としては如何なる社會學も存立し得ない、そして社會學即ち形式社會學は社會の諸内容を夫れ夫れ抽象して其の對象となす他の諸般の社會科學と同じく、一の特殊社會科學であると思ふものである。かくてジムメルは本論文(一)に於て述べしが如き私の純正社會學と稱するものと、實質に於て大體上一致するものを、特殊社會科學としての社會學の全體と認め、そして私が總合社會學と稱するものも、亦組織社會學或は社會科學一般的方法論と稱するも共に承認しなかつたのである。

今右の如きジムメルの社會學論を以て前代未聞の一大創見と認め彼を以て眞の社會學の創設者の如く見る社會學者が獨逸の新進社會學者中に少なくないのは、歐米諸國の學者の國民的偏見から考へると敢て怪むに足らないが、只不思議なのは我國の社會學者中其等の獨逸社會學者の偏見に盲從して同様な見解を唱へて居る人々又は居た人々の少なくない事である。獨逸社會學者の説には吾人の學ぶ可き處は多々ある。併しそれが爲めに彼等の偏見までも受け入れる必要はない。

私は嘗て述べし如く今日ジムメルの社會學概念を祖述する多くの獨逸社會學より以前に、まだ獨逸に於てさへ彼の社會學概念を承認する人々の殆んどなかつた時代に、既に其の價值を本論文中さきに述べしが如き理由にて十分に承認し、タールドの社會學概念を私自身の立場から修正して、新しく發展させる爲めに、ジムメルから學ぶ處少なくなかつた。しかもジムメルの社會學論の眞義を詳しく深く吟味すれば、夫れは決して社會學を一の特殊社會科學として確立して居るものでなく、タールドの純正社會學と同様に、本論文中是れまで述べ來りしが如き理由によりて、實際上社會學を一の一般社會學として確立して居るものであると考へた。更に私はタールドが純正社會學を以て社會學の全體と見るのが謬見であるのと同様に、ジムメルが形式社會學を以て社會學の全體であると見るのもヤハリ謬見であると認め、純正社會學或は形式社會學の外に、さきに述べしが如き意味での總合社會學を社會學の一部門として、更に今日の狀態から見て便宜上社

會科學の一般的方法論をもヤハリ社會學の一部門として立て、かくて今日では社會學は大體上右の三つの部門から成立す可きものなるを主張して居たのである。

私はジムメルが「社會學」に於て一先づ完成せる社會學論に對して、右に述べしが如き考へを抱いて居たのであるが、然るに彼が死去する一年前千九百十七年に公にし、彼の最とも圓熟せる最後の社會學論を論述せる「社會學の基本問題」に於て、彼は大體上私の社會學論と同様な見解に到達したのを見て、大に驚くと同時に非常に愉快に感じたのである。

但し科學を理解科學と了解科學との二部類に大別し、社會學を以て一の了解科學と見る私の見解には、ジムメルのみならず、他の何れの社會學者もまだ到達して居ない。

同書に於ては實に彼は形式社會學を「純正又は形式社會學」

と稱し、其の外に廣義の社會學の概念、及び狹義の社會學の一部門としての「一般社會學」(die allgemeine Soziologie)の概念を立ど、私の總合社會學と稱するものを承認し、更に哲學的社會學の一部門として彼が「社會科學の認識論」と稱するものを立て、私の組織社會學或は社會科學一般的方法論と稱するものをも承認して居るのである。要するにジムメルは千九百八年の「社會學」

に於て、一の特殊社會科學としての形式社會學を社會學の全體と見る彼の社會學論を完成して後十ヶ年を経て、私が千九百十七、八年頃から唱へて居た社會學論と大體上同様なものに到達したのである。

そうして此の十ヶ年間はジムメルの思想が最も同熟せる時代であることを考へると、私は益々興味を感じるのである。尙ほ彼は千九百八年に「社會學」を公にして以來、最早社會學に興味を有たなくなつたことを許すトレルチに語つたと云はれ、又ティンニスは千九百十三年にジムメルが彼の研究が他の方針に進んだと云ふ理由を以て獨逸社會學會の理事を辭したと傳へて居るが、併し私の察する處では、それは決して彼が社會學其物に對する興味を失ふたと云ふ意味ではなく、社會學

とは即ち形式社會學であるとする彼自身の從來の社會學に對して興味がなくなつたと云ふ意味であらうと思はれる。そうして其の間に彼は私の社會學概念と大體上同様なものを、潜かに構成しつゝあつたと云ふことは、其の間に公にされた彼の著作や、又現象學派の勃興や、マックス・ウェーバーの社會學や、マックス・シエラーの社會學が大に勢力を振ふて來たことなどの事情によりて推察されるのである。

「社會學の基本問題」はゲッティンゲン叢書中の一小冊子として出版されたものであり、又既に邦語にも譯されて居ると云ふから、此處には只同書に於けるジムメルの社會學概念が、結局如何に私の社會學概念に接近して來たかを示すに必要な程度内に於て、同書に就て考察するに止める。

(a) 廣義の社會學

ジムメルは本書に於ても、人間は其の存在及び行動の各瞬間に於て、一の社會的實在物であると云ふ事實によりて規定されて居ると云ふことからして、人間を對象とする一切の學問は「社會生活の學」に還元され融合される様に見へるが、併しかゝる總包的な社會學概念を設定したればどて何等新たに得られるものはなく、只一の新しき總名を造るに過ぎないと論じて居る。併しそれと同時に、社會學概念の根柢に、夫れ自身に於て重要な又效果の大なる一の事實が存在することを大に強調して居る。彼の論ずる處によれば、「人間は其の全本質及び全表現に於て、他の人間と相互作用をなして生活すると云ふことによりて規定されて居ると云ふ洞見は、確かに一切の所謂精神科學に於て吾人を一の新しき考察法に導かねばならぬ」。

かくてジムメルは先づ第十八世紀の學者は、社會生活の重大なる諸内容即ち言語、宗教、國家、經濟等を、個人主義的にか、然らざれば神秘主義的に説明するより外に、之を説明する方法を知らなかつたが、今や之を社會生活、心と心との相互作用によ

りて説明せんとする新しき有効なる考察法が社會學の名の下で發達し來れることを述べ、次にかゝる考察法は歸納法と同じく一切の文化現象の研究に適用される處の、歴史科學及び精神科學一般の方法であつて、夫れ自特有の内容を具へる一の科學ではないことを論じたる後、しかもこの方法はまさしく上述の如き普遍性を有するが故に、個々の諸問題に對して一定の共同的基礎を構成し、此處に個人の力を相互的に規定させる社會化の共同性に對應して、社會學的認識仕方の方の共同性が成立し、それによりて一の認識範圍の問題が、他の認識範圍の問題の解決及び深化によりて解決され深化されることや、又諸問題の對象は何れも社會化に基因すると云ふ事によりて、諸問題の研究は相互に他の解決及び深化を助けることや、又諸問題の共同的基礎が究明されることなどを、實例に就て説明して居る。そうしてジムメルは其等の考察によりて、單なる方法の概念を超へて、社會學の第一の主要問題圈を見定めんとして居る。

今ジムメルの論ずる處によれば、社會學の此の第一の主要問題圈は人間の存在の殆んど全範圍を包括するものであるが、しかも夫れが爲めに科學の一般的特質たる處の、一方面的抽象の性質を失はない。是れ經濟的及び精神的諸領域、政治的及び法律居るとしても、尙ほ此の規定は完全なる體驗内の各點に於て、他の方面から生來する他の諸規定と組み合ふて居るからである。かくて人間生活の基礎附け力及び包括的公式としての社會的生活によりて、人間生活の由來を究明し、人間生活を解釋する外に、吾人は人間生活の内容の當體的或は物件的意味からも、更にあるがまゝの個人の本质及び生産能力からも、人間生活の由來を究明し、人間生活を解釋せねばならない。尙ほ今日ではまだ確實に決定されて居ない他の範疇から、人間生活は究明し解釋し得られるのである。そうして直接的な、統一として感知される吾人の生活及び作業の、此等の分拆及び構成仕方は科學的には同じ位に立ち、同一の權利を有つて居るので、其の何れも認識の唯一の途、又は夫れ自身だけで充分なる途を、吾人に與へる特權を主張することは出来ない。吾人の現實在の社會的形式によりて規定されて居る分拆及び構成仕方も同様である。是れもやはり只一方面的なるものであつて、他を補充し、又他によりて補充されねばならない。併し右の點をよく念頭に置いて、吾人は此の分拆及び構成仕方は人間存在の全體の一の認識可能を原則的に與へると云ふことが出来る。かくて吾人は政治や宗教、經濟や法律、其他の文化現象の事實に就て、此等の事實は、個人的に責任ある作業及び客觀的當體的意味を離れて、社會と云ふ主體の作業として如何に理解され、又此の主體の發達として如何に記述し得られるかを考察し得る。そうしてかゝる考察は、ダトヒ社會と云ふ主體の本质に就て、完全な、疑はれ得ない定義がまだ確立して居なくとも、其等の事實に就て收得されたる認識の價值を空想的なものとならしめないであらう。されば社會學的方法が羅馬の衰亡や或は大文化國民間に於ける經濟と宗教との關係や、獨逸國民的國家思想の始源或はバロク式の勢力を究明する爲めに適用されるならば、即ちかゝる事象或は狀態が辨別され難き微細な貢獻の總計として、個人の相互作用の生果として、超個人的團體統一體の生活階段として現はされるならば、吾人は社會學的方法に従ふて遂成されたる此等の諸研究を、社會學と稱し得るのである。

右に述べし處によりて、ジムメルが晩年に廣義の社會學と考へたものは、如何なるものである。

かゝ察知されるが、要するに彼は社會學的方法を以て歴史科學及び精神科學一般の新しき且つ甚だ重要な一方法と認め、そうして更に此の方法によりて行はれる一切の研究を包括して、一の社會學と稱したのである。今ジムメルは彼の學問的生活の始めから社會學的方法を大に重要視して居たので、千八百九十四年の「社會學の問題」に於てもヤハリ之を重要視して居る。併し方法としての社會學、或は社會學的方法是如何に重要であつても、それはヤハリ一の方法であつて、夫れ自身特有の内容を有する一の科學ではない。かくて彼は方法としての社會學から區別して、科學としての社會學は如何にして建設され得るかと云ふ問題を起し、此の問題を論述する爲めに先づ「社會學の問題」を公にし、そうして社會學とは即ち形式社會學を意味するもの、或は形式社會學として始めて社會學は、一の科學として確立され得るものなることを明にせんとしたのである。それより以後は彼は社會學的研究に於ては、一の科學としての形式社會學の確立に専ら力を注ぎ、そうして「社會學」に於て一先づ其の目的を大體上成就したのである。然るに其の後形式社會學を以て社會學の全體と見る處の、彼が多年の勞力を費して自から定立せる社會學概念に對して、彼自から満足することが出来なくなり、更に完全なる社會學概念を構成せんとするに當つて、彼が學問的生活の始めより實際上常に重要視して居た社會學的方法を、新たに論理的に考察し、先づ夫れに基いて廣大なる實質的或は内容的社會學の概念を樹立せんとしたと推察される。

かくて「社會學の基本問題」に於ては、彼は先づ上に述べしが如き廣義の社會學の概念を説いたのであると思はれる。併しかゝる廣義の社會學が嚴密なる意味での一の科學と認め得られないことは云ふまでもない。若し敢て之を認めんとするに於ては、それこそ社會學を一の百科全書的學問に化することになるのである。とにかくジムメルが「社會學の基本問題」に於て新たに社會學の領域を規定せんとするに當つて、先づ廣義の社會學の概念を説いたことは、彼は形式社會學を以て社會學の全體と見る彼の從來の社會學概念に對して、如何に不滿の念を抱て來たか、又私が總合社會學と稱するが如きものを以て、彼の從來の社會學概念を補充する必要を如何に強く感じて來たかを、暗示する一の徴候であるとして、私は大に興味を感ずるのである。

(b) 一般社會學 *die allgemeine Soziologie*

私が總合社會學と稱するが如きものを以て形式社會學を補充し、以て一層完全なる社會學概念を構成せんとするジムメルの晩年の志向は、彼が狹義の社會學と見るものに就て先づ第一に構成せんとせる一般社會學の概念によりて、更に積極的に明示されて居ると思はれる。然らば彼が一般社會學と稱するものは如何なるものである。

ジムメルの論ずる處によれば、廣義の社會學から、更に一方面的抽象を進めて行くと、先づ一般社會學と稱し得られるものが成立する。要するに人間生活の一切の有り得る事實は社會團體内に於て又社會團體によりて實現されると云ふ點に注目して考察すると、社會的生活は其等の事實の根元或は主體として認められると云ふことに基いて、又只夫れのかに基いて現はれる處の、其等の事實の實現の共同的諸性質、或は諸特徴が存在せねばならない。そうして此處に一定の問題群が成立するが、先づ左の如

き問題は之れに屬する。即ち只何れかの團體によりて擔はれて居ることに於てのみ實現する處の、基だ相異なる諸種類の歴史的發達を通じて、或共同的法則或は只右の事實にのみ還元され得る或律動の存在することが、發見されるや否やと云ふ問題である。そうして此の問題に就ては、一切の完成されたる發達の途は、分化されない統一から、分化されたる多様を経て、分化されたる統一に達することであると云ふ説や、又一切の歴史的な生活に於て、有機的共同から器械的並存へ進行する過程が認められると云ふ説や、又人間の知識の發達は神學的階段より出發し、形而上學的階段を経て、實體的階段に到達するものであると云ふ説などが唱へられて居る。

更に此の問題群に左の如き問題も屬する。即ち個人の力の條件から區別して見たる團體の力の條件は何であるかと云ふ問題である。尙ほ社會學的に考察されたる一切の狀態及び事象に對して起される左の如き問題群も亦、此の問題群に屬する。即ち集團的態度、行爲、思想構成は、價值から見ると、之れに對應する處の、個人から直接に生起する表現と如何に差異するか、或は何等の理想的尺度によりて測定すると、社會的顯現と個人的顯現との間に、水準の如何なる差異が存在するかと云ふ問題である。

右に述べし處によりて見れば、ジムメルが一般社會學と稱するものは、私が總合社會學と稱するものと、問題呈出の仕方や認識目標に於て種々異なつて居るが、併し其の主旨に於て大體上之れと一致するので、要するにジムメルが一般社會學と稱して新たに立てんとせるものは、大體上私が社會學の一部門として重要視し來れる總合社會學に當るのである。

(c) 純正或は形式社會學 *die reine oder formale Soziologie.*

形式社會學を以て社會學の全體と見る見解から、之を一般社會學と相伴なふて社會學の一部門をなすものと見る見解に轉せるジムメルは、社會學の全體に於ける形式社會學の地位、或は夫れと一般社會學との關係を如何に決定し、又其の關係に於て形式社會學の領域を如何に規定するに至つたか。ジムメルが此等の問題に就て「社會學の基本問題」中に論述して居ることは、彼の形式社會學概念の最後の規定或は大成を表示するものとして、私が大なる興味を感じるものである。

それで先づ左に彼の論述の要点を述べることをする。

科學的抽象は更に他の方針から、社會現象の完全なる具體性を貫きて一線を畫き、私には本來全然決定的或は根本的であると思はれる意味にて「社會學的」なるものを一切結合して、之を一の認識仕方、統一性に、即ち一の統一的なる科學に作り上げる。但し此の「社會學的なるもの」は現實態にありては決して右の如くに孤立し又再び聯結しては存立するものでなく、此の現實態の生活統一から、呈出されたる一定の概念によりて抽象され抽き出されたるものである。既に述べし如く總ての具體的な社會的事實は、只社會的であるだけでない。其の内には社會的に擔はれ或は呈出され或は傳播され、かくて社會生活の全體構造物を成す處の、感覺的又は精神的、技術的又は哲學的な性質の物件内質或は常體內質が、常に存在するのである。しかもかかる諸内容の此の社會的形成は又夫れ自身にて一の分業的科學に於て研究し得られるものである。社會は個人の相互作用であると云ひ得られるならば、此の相互作用の諸形式を記述することは、「社會」の最狹義及び最固有義に於て解される社會學の任務であると云ひ得られう。第一問題群（一般社會學の取扱ふ問題群）は、歴史的な生活が社會的に形成されて居る以上、且つ全體としては此の社會的形成性を包括しつゝ、全歴史的な生活によりて充たされて居るが、此の第二の問題群は生動する人間の單なる總計から社會及び諸社會を作る諸形式其物によりて充たされて居る。そうして此の第二の問題群の研究は吾人が「純正社會學」と稱し得るものであるが、それはつまり具體的現象から社會化の要素を、夫れ自身ではまだ社會的でない處の社會化の内容及び目的の多様から歸納的及び心理學的に切り離して、抽き出すのである。一方に於ては吾人は、其の目的及び全意義に於て考へ得られるだけ相異なる社會的諸關係に於て、個人相互の同様な形式的關係仕方を見出し、他方に於ては内容的に同様な關心が、甚だ相異なるれる形式によりて形成されたる社會化に於て表現されて居ることを見出す。かくてあるがまゝでは形式と内容との結合から成立する社會生活の統一から、特に社會化の形式を切り離し、之を確定し、組織的に整頓し、心理學的に基礎付け、其の歴史的發達を追求することは、社會學の正當なる任務である。此處に社會學は第一問題群に於ける如く其の對象（或は其の對象とする事物）に従ふて、特殊科學であるのではなく、其等の對象に對する其の明白に限定された問題呈出態度に従ふて一の特殊科學であるのである。

右に述べし處によりて見れば、ジムメルの形式社會學の概念其物は最後まで變はつて居ない。そうして又私の云ふ意味で、それは一の一般社會學であつて、決して他の社會科學と同じ意味での特殊社會科學でないことは、社會化の形式と内容との關係に就て簡明に總括的に述べて居ることによりて、明かに推察される。かくて此處に特に吾人の關心する問題は、社會學全體に於ける

形式社會學の地位、或は一般社會學と形式社會學との關係である。そして此の問題に就て彼の論ずる處を見ると、要するに彼はさきに述べし如く、廣義の社會學の概念から、社會化されたる内容の方面に於ける科學的抽象を更に一步推し進めることによりて、一般社會學の概念を立てたのであるが、今形式社會學の概念を立てるに當つては、彼は「他の方針」から科學的抽象を推し進めて居る。即ち社會化されたる内容の方面に於て更に一般社會學以上に科學的抽象を推し進めるのでなく、社會化されたる内容から特に社會化の形式を抽象すると云ふ方針をとつて、科學的抽象を推し進めて居るのである。かくて彼は先づ社會化されたる内容の方面に於て、夫れ夫れの内容を對象とする特殊社會諸科學に對して、一般社會科學と認めらる可き一般社會學の概念を立て、次に一般社會學に就て特に社會化の形式を抽象して之を其の對象となす形式社會學或は純正社會學の概念を立てんとするので、つまりギッディングスが先づ一般的具體的社會科學として社會學を建設し、次にかゝる社會學から一般的抽象的社會科學として Politics なるものを建設せんとしたのと、大體上同一の方針をとつて、社會學の全體を建設せんとしたのである。さればジューメルの方針はギッディングスの方針と同じく、先づ一般的抽象的科學、私の立場から嚴密に云へば科學の一般的抽象的部門として純正社會學を建設し、そして其れに基いて、一般的具體的科學即ち科學の一般的具體的部門としての總合社會學を建設せんとする私の方針とは、まさしく正反對なものである。併し私は私の方針はジューメルやギッディングスの方針よりも正當なるものと確

信して居るので、詳しくは本論文の「結論」総合社會學概念」に於て論述するが、要するに私は先づ純正社會學を建設し、其れに基いて総合社會學、或はジムメルの「一般社會學」と稱するが如きものを建設すると云ふ方針をとらねば、総合社會學或は「一般社會學」を所謂百科全書の學問と稱せられるが如き混沌たる社會的知識の塊から區別される、堂々たる健實な一の科學として、詳しく云へば社會學の最後の或は最上の部門として建設することは、甚だ困難であると信するのである。

(d) 哲學的社會學

「社會學の基本問題」に於てジムメルが論述して居る彼の新しき社會學概念に就て、私が最後にヤハリ大なる興味を感じたのは、彼の哲學的社會學の概念である。さきに述べし如く、ジムメルは「社會學」に於ては、社會學は總ての科學と同じく哲學の二領域即ち認識論と形而上學との間に插まれる一の社會科學であると論定して居る。そうして社會學は一の科學であるならば、社會に關する哲學的研究即ち社會哲學の存立することは疑はれないとするも、否な夫れは吾人の一の必然的認識欲求であるとするも、哲學的社會學なるものは存立し得ないものである可きである。かくてジムメルが哲學的社會學を云々するは、彼の科學論に矛盾せる思想であると云はねばならぬ。併しそれは兎に角として彼が哲學的社會學と稱して居るものは、私の社會學論から見て實質的に大に注意す可きものを含んで居る。先づ彼が哲學的社會學と云ふは如何なるものであるかを調らべて見よう。

ジムメルは先づききに述べし如く、社會學は總ての他の精密科學の如く、認識論と形而上學との間に挿まれて居るものなるを説いて居るが、夫れより進んで論述して居る處によると、個々の社會科學の問題は、先づ一定の概念、公理、研究法が爭ふ可からざるものとして前定されて居るに非らずば、研究されることが出来ない。そうして何れの特殊社會科學も、此の基礎を夫れ自身では全く問題とせずに承認して居るが、それは正當である。否な何れの特殊社會科學も此の基礎を夫れ自身の領域内で研究することが出来ない。是れ敢て之をなさんとするに於ては、明かに一切の餘他の社會科學を取り込まねばならないからである。かくて此處に社會的特殊諸科學の認識論として、即ち社會的特殊諸科學に於て形成的及び規範的に作用する基本の分拆及び組織論として、社會學が現はれてくるのである。

ジムメルは夫れより社會に關して呈出される諸般の形而上學的問題を考究する社會形而上學としての社會學の一般的性質を簡単に論述して居る。

右に述べし處により見れば、ジムメルが哲學的社會學の一部門として、「社會的特殊諸科學の認識論」と稱するものは、即ち大體上私が組織社會學或は社會科學一般的方法論と稱するものに相當するもので、かくてジムメルは彼の最とも圓熟せる最後の社會學論に於ては、啻に形式社會學或は純正社會學の外に總合社會學即ち彼の「一般社會學」と稱するものを認めたのみならず、更に私の組織社會學或は社會科學一般的方法論と稱するものをも認めたことが覺られるのである。併し彼は彼が「社會的特殊諸科學の認識論」としての社會學と見るものを、哲學的社會學の一部門と見做して居るが、私はそう見做ないのは是れ學問の根本的分類に關して私の見解は彼の見解と異なつて居るからである。要するに彼は一般の見解に従ひ學問を根本的に哲學と科學とに大別し、かくて認識論を哲學の一學科と見做して居るから、社會科學の認識論をも哲學的社會學の一部門と認めたのであるが、然るに私は學問を根本的に學問論 *die Wissenschaftslehre* と哲學と科學とに大別し、學問論とは認識論、論理學及び方法論を包括するものにして、そうして哲學と

は形而上學或は夫れと價值論とを意味するものと解するのであるから、科學方法論は學問論の一部門をなすものにして、哲學に屬するものでなく、隨ふて社會科學方法論は科學方法論の一部分をなすものとして、社會哲學に屬するものでないと考へるのである。かくて私は社會哲學とはつまり社會形而上學或は夫れと社會價值論とを意味するものと解し、ジムメルが哲學的社會學の一部門として社會形而上學と稱するものだけを社會哲學と見るのである。尙ほ私は本論文(一)に於て述べし如く、社會科學方法論は本來學問論中の科學論に屬するものにして、社會學に屬するものでないが、只研究の現状から見て之を假りに社會學の一任務と見做して研究することが便宜であると考へるから、其の研究を一般社會科學としての社會學の一部門と認めるに外ならないのである。以上述べし如く社會科學の認識論或は方法論の學問的所屬に就ては、私はジムメルと所見を異にして居るのであるが、とにかくジムメルが晩年に、私が假りに社會學の一部門と見做すものをも、ヤハリ社會學の一部門と認めたことによりて、彼の最とも圓熟せる最後の社會學概念は、社會學とは即ち形式社會學を意味するものに外ならぬと見る彼の未熟な社會學概念とは大に異なつて、如何に私の社會學概念と一致して來たか推察されると思ふ。

私は本節の最後の一項として、「ジムメル以後の形式社會學概念」と題して、特にフイアカント、ウイゼ及びクラカウエル等の社會學概念を論評し、彼等も形式社會學を以て明かに一般社會學と認め、更に形式社會學を以て社會學の全體と見ることには不滿を感じ、種々なる名稱で、又種々なる方面から見て、私の總合社會學と稱するものに實質上一致又は接近する社會學の部門を設け、以て社會學概念を完成せんとして居るかを批判的に論究する積りであつたが、本節はあまりに長くなる爲め、之を省略することとした。併し其の批判的論究の一部分は、本論文の最後の節「結論——總合社會學概念」の中に論述することとする。